

# 峇嚕家的食卓

生けもの

## 【仮タイトルの変遷】

---

第一案「パッヘルベルの巡礼」

↓

第二案「六年の孤独」

↓

第三案「マスターベーション・シンドローム」

↓

第四案「ビューティフル」

↓

第五案「湖畔まで」

↓

第六案「締め切りがあるから」

↓

第七案「さよなら、バイバイ」

↓

最終案「吝嗇家の食卓」

「小説のことは小説家にしか判らない、と云うワンフレーズだけが、前後の文脈や正確な言葉の定義などを置き去りにして、箴言の如く独り歩きしてしまうのは、あまり望ましい状態とは云えないな、と岸田里流は想っていた。仮に、小説のことは小説家にしか判らないのだとすれば、ルポルタージュのことはルポライターにしか、MBのことはMB者にしか判らない、と云うことにもなりかねない。最後の例は少し強引だったかも知れないが、大筋は同じようなことではあるまいか。さりとて、この件に関して独自の新たな意見や考えがある訳でもなし。

親父が死んだ。五十八歳の誕生日の、三日前の明け方のことだった。

俺はその日、その報せを受けた数時間後に、一篇の短い小説を書き上げた。『1989年1月7日、明仁』と云う、些か含みのあるタイトルの、六百文字にも満たない掌篇であった。

親父が死んだので、AVを借りてみた。どうしてそんなことをしようと思ったのかは定かでないが、何故か直感的にそうしていたのだ。早速、家に帰って観始めたのだが、全く興奮すると云うこともなく、寧ろ白けて馬鹿馬鹿しくなってしまう、冒頭の十数分で観るのを止めてしまった。こんな時に、俺は一体何をやっているんだろうか――。そんな風にも思ったし、事実俺のやっていることは一見、支離滅裂と云われても仕方のないことなのかも知れない。しかし、それでも俺は、再びそのAVを観直し始めることにした。今回もやはり、性的な興奮には程遠かったが、それでも何か少し、自らの心の中で微かな変化が起こったように感じられた。果たしてそれがどのような変化であったのかは、今もって自分でも明言することは難しいのだが、とにもかくにも俺は明日から、親父の仕事の跡を継がなければならない。

ふと、AVの再生をもう一度停止させて、生中継で放送されているニュースの映像に切り換えると、漢字二文字を大きく書き、それを額縁に入れたものを誇らしげに掲げている男の姿が繰り返し流されていた。そこには非常に読み取り易い毛筆で『平成』と記されていた。俺はこれから、その平成の世を生きていかなければならない。いや、俺こそが『平成』であるのだと云うほどの、強い信念と覚悟が必要であるようにさえ想われた。まだまだ、あまり自信はないのだけれど。さて、どうなることやら。

いつどこから歩き出したのか、もうすっかり忘れてしまっていた。ただ、遥か西の果てにあると云う『緒多霧城』に向かっているらしいと云うことだけは、何故だか不思議と憶えていた。その『緒多霧城』は、小さな湖の畔に建っており、それより先には未だ何人たりとも足を踏み入れたことがない、と云う話も臆気ながら記憶に残っていた。

脚の痛みには耐えかねた鹿々田蒔（かしかだまき）は、ゆっくりとその場に倒れ込み、全体重を尻から上に預けてしまった。

――もう無理です、歩けません。まるで、全身がそう云っているようだった。

――休みたかったら……いや、もう歩きたくないんだったら、いつでも止めていいんだぞ。そのまま尻から根でも生やして、動かなくなったっていい。

小説？ いいえ、ケフィアです。

鹿々田蒔の弁明によれば、彼女は元々女優志望で、小説を書き始めたのは、ほんの気紛れだったそうである。彼女に『小説でも書いてみたら』と勧めた西葛西と云う准教授は、十三年前に〈サークル〉の起こしたあの無差別テロ事件で命を落としており、直接話を聞くことは出来

なかった。十三年前――つまり、SW70年3月20日午前8時――。

剥げかけたTシャツのプリントが、暖房の風を受けてゆらゆらと小刻みに震えていた。